

提言

全国福祉レクリエーション・ネットワーク

1 福祉レクリエーション運動の歴史

1947年から開催されてきた全国レクリエーション大会は、1989年、全国レクリエーション研究大会として福岡の地で生まれ変わりました。

その研究大会の一部門として、「福祉レクリエーション研究部会」が実施され、福祉レクリエーションの重要性が論議されました。

この大会を契機として、1991年、「全国福祉レクリエーション・ネットワーク」が誕生しました。

その後、ネットワークは着実に会員を増やしつつ、規約等を整備し、全国に多くのグループ会員、個人会員を有する組織として、1993年、特定公益増進法人 日本レクリエーション協会(2011年から公益財団法人)に加盟し、現在に至っております。

1994年には、(公財)日本レクリエーション協会の指導者養成規定の改定を受け、福祉領域における専門的な資格としての福祉レクリエーション・ワーカーが誕生し、全国福祉レクリエーション・ネットワークは、その受け皿団体として新たな出発を切りました。

福祉レクリエーションの専門団体として、全国福祉レクリエーション・ネットワークが開催してきたセミナーやフォーラムは、それまで福祉領域に特化した事業がなかったこともあり、多くの方々に受け入れられました。そして全国に、都道府県単位、または市区町村単位のネットワークがつけられ、セミナーや講習会が開催されるようになりました。

福祉レクリエーション運動が全国的な広がりを見せ始め、全国各地で地元ニーズに根ざしたセミナーやフォーラムが開催されるようになる一方で、全国単位で行われる事業への参加者や全国福祉レクリエーション・ネットワークへの参加者は減少していきました。

2009年には、介護福祉士養成課程の改変が行われ、それまで福祉レクリエーションを後押ししていた「レクリエーション活動援助法」どころか、レクリエーションという文言自体が養成課程から消去されました。この段階に来て、遅まきながら私たちは福祉レクリエーションに取り組む姿勢を再構築する必要を感じました。

この間、全国6つのブロックでも様々な取り組みが行われてきました。2010年から動かしてきた「福祉レクリエーションキックオフミーティング」のまとめにあたり、将来の福祉レクリエーション運動につなげるため、各ブロックの動きを振り返ります。

(1) 北海道・東北ブロック

北海道・東北ブロックでは、ネットワーク結成時に、既に札幌において「リハビリ・レクリエーション研究会」が活動していました。1992年には、福島県において、「福祉レクリエーションネットワーク in ふくしま」が活動をはじめ、他の県においても、福祉レクリエーションのセミナー等が開催されるようになってきました。少し遅れて、岩手福祉レクリエーション研究会が設立され、現在も活動を続けています。

ブロック代表は、可能なときには、持ち回りの形態をとりましたが、現在は、会員が不在の県もあり、首都圏に最も近い県と言うことで、福島県が担当しています。また、ブロック研修会は、ネットワークが自主的にセミナーを開催している岩手県と福島県で行っていますが、なかなか他県からの参加はないようです。会議は、7月には岩手県で、2～3月には福島県で開催し、ブロック内の会員が集まっています。

(2) 関東・甲信越ブロック

ネットワーク設立以来、長期にわたって東京都内を会場とし、ブロックセミナーを開催してきましたが、平成18年度からはブロック代表となる常任委員をブロック内持ち回りとし、それにあわせてブロック研修会の会場も持ち回りにしてきました。

その結果、それぞれの地域でネットワークの構築の進み具合が違っており、県によっては他の事業で手一杯で、ネットワークのブロックセミナーを開催するだけの余力がなかったり、他県の協会と連携が取りづらいという課題や、各県の運営委員を取り巻く環境がそれぞれに違うという、多様な地域性も見えてきました。

一方、持ち回りにすることで、他県の状況を把握することができ、それぞれの県や地域と共通の課題については、新しい取組みの動機づけになったとの声もありました。

ブロックとして、顔の見える会議を重ねることで、運営委員同士の情報交換と、福祉レクリエーション支援者としてのスキルアップが出来たことは、大きな収穫といえます。

福祉レクリエーションを学ぶ仲間の存在は、様々なネットワークを広げるエネルギーにもなっており、今後は更に他領域の団体や専門職との連携を深めて、地域のニーズに寄り添ったセミナーを開催し、多くの方々に福祉レクリエーションの重要性を伝えていく役割があると考えています。

(3) 北陸・東海ブロック

平成9年1月

北陸・東海ブロックは、富山県、石川県、福井県、岐阜県、静岡県、三重県、愛知県の全7県の運営委員が愛知県名古屋市ルブラ山王に集まり、ブロックの運営、セミナーの開催、ブロック代表運営委員の選出について協議が行われました。運営についてはブロック代表が取りまとめ実施、セミナーについては各県の持ち回りです。ブロック代表については、平成9、10年度富山県、平成11、12年度愛知県、平成13、14年度石川県、平成15、16年度静岡県、平成17、18年度三重県、平成19、20年度岐阜県、平成21、22年度富山県、平成23、24年度愛知県が担当しました。

ブロック運営も2巡目に入りました。これからはセミナーの開催などを充実し、会員の減少を止めて増加を図り、安定したネットワークにしたいと思います。

(4) 近畿ブロック

近畿ブロックは 全国福祉レクネットワーク設立当初から活動を始め、平成5年から11年の間に二府四県が近畿ブロックに参加し現在に至っています。

平成15年に第1回近畿ブロックフォーラムが和歌山でおこなわれ、3回目からはセミナーに変わりましたが、二府四県持ち回りで毎年欠かさず行っています。

また、セミナー前にはブロック会議を行い、セミナーの打ち合わせのみならず各府県の交流も考え、近状報告など行い他府県の状況を把握することができるようになっていきます。

近年、会員数も減少していることから、今後の近畿ブロック、またネットワークでどのような活動の場にしていけばいいか考えられます。

しかし、今後ますます福祉が多様化していく中で、福祉レクは今以上に重要性が高くなることが考えられます。

ブロックとしては、その課題に向かって活動を進めていきたいと思っています。

(5) 中国・四国ブロック

中国・四国ブロックでは、昭和50年代から広島県において実施していた「高齢者福祉レクセミナー」を元に、中国・四国ブロックセミナーとして福祉レクセミナーを開催してきました。

また、ブロック内では鳥取県、愛媛県、香川県、徳島県においても地域のネットワークを構築し、各種研修会を実施するとともに、相互に講師を紹介していました。

中国・四国地方はエリアが広く、定例的に運営委員会を開催することは困難であり、ネットワークの活動としては、ブロック代表(広島県)が在籍する協会が主体となってブロックセミナーの開催を中心に実施してきました。このネットワークの中で培われた人脈により、中国・四国地域で開催された全国レクリエーション大会の企画に際しては、講師紹介を行ったり、全国福祉レクネットワークがコーディネートしたセッションの提案・運営を実施し、一定の成果を上げることができました。この体験を基に、現在では全国レクリエーション大会において、平成23年に開催された長崎大会以降、継続して全国大会実行委員会に協力して全国福祉レクネットワークがコーディネートするセッションの実施へと発展しています。

今後の課題としては、会員へのサービスのあり方、会員相互の交流について検討する必要があります。

(6) 九州・沖縄ブロック

故垣内芳子氏が唱えた「生活の快としてのレクリエーション」「心の問題としてのレクリエーション」「人間の生きる権利としてのレクリエーション」を受け、昭和40年代から福岡県を中心に福祉レクリエーションサロンの前身となる活動が展開されてきました。そこに(公財)日本レクリエーション協会の積極的な助言もあり、1989年、福岡で開催した全国レクリエーション研究大会において全国福祉レクリエーション・ネットワーク設立の条件が整いました。福祉レクリエーション・ネットワークの歴史は福岡から始まったといっても過言ではありません。

全国組織設立後は、九州・沖縄ブロック各県から運営委員を選出していただき、常任委員の任期2年間で、各県持ち回りで運営しています。また、常任委員がいる県でのブロック研修会を継続して開催しています。

全国福祉レクリエーション・ネットワークの初代代表を務められた大石正人氏を中心に、各県の交流も盛んで、いつも充実した運営がなされています。

詳細は、大石氏がまとめられた「福祉レクリエーション・ネットワーク 九州沖縄ブロックの20年」に詳しく述べられています。

2 福祉レクリエーションの現状

我が国における福祉レクリエーション運動は、全国福祉レクリエーション・ネットワークのみが行ってきたわけではありません。

各地において従前から地道な活動を通して、障がい者や高齢者の健康づくりや生きがいづくりに取り組んでこられた多くの先輩方がいました。社会福祉を人権の問題として、先進的に取り組んでこられた先輩方がいました。

1970年に発表されたレジャー・レクリエーション憲章では、「レジャー・レクリエーションはすべての人間に与えられた基本的な権利」とされ、1973年には(公財)日本レクリエーション協会が「レクリエーションは人間の生きる喜び」と言うスローガンを発表しました。これは、障がいの有無にかかわらず、年齢や性別にかかわらず、誰もが自分自身の人生の主人公になる権利があることを宣言したもので、2011年に公布された「スポーツ基本法」の中で、スポーツ・レクリエーションを国民の権利と謳った先駆けとなるものでした。また現在の「スマイル・フォー・オール＝すべての人々に笑顔を」というスローガンに活かされているものだと考えます。

一方、福祉レクリエーション・ワーカーの制度は、受講者・受験者ともに減少傾向が続いています。その傾向は、レクリエーション・コーディネーター、レクリエーション・インストラクターにも当てはまります。

私たち全国福祉レクリエーション・ネットワークの会員数も減少を続け、一時は組織の存続さえ危ぶまれる状況にありました。その状況は、現在も大きく変わっているわけではありません。存続の危機は何とか回避できてはいるものの、全国福祉レクリエーション・ネットワーク、および、各都道府県単位の福祉レクリエーション・ネットワークの会員数は伸びず、福祉領域におけるレクリエーションの存在意義さえ不透明になっています。

3 キックオフミーティングの経過

全国福祉レクリエーション・ネットワークは、2009年から全国レクリエーション大会においてセッションを担当させていただくことができるようになりました。2010年の静岡大会、2011年の滋賀大会、2012年の福井大会の3大会では、福祉レクリエーションの刷新を目指し、キックオフミーティングを継続してきた。その経過は、下記のとおりでした。

全国レクリエーション大会 研究フォーラム

あなたが変わる！ 福祉レクリエーション
～未来へむけて福祉レクを変えるための参加型ミーティング～

パート1(静岡) 2010年11月

パネリスト 菌田碩哉氏(実践女子大学教授)
和久田佳代氏(聖隷クリストファー大学講師)
砂橋昌義氏(NPO 広島レクリエーション協会事務局長)
杉浦史晃(全国福祉レクリエーションネットワーク事務局次長)

コーディネーター 佐藤喜也

「それぞれが何を大切に思って活動をしているか」、「現在、レクリエーション運動がうまくいっていないのは何故だと思うか」などといったことについて、参加者も含めて様々な意見が出された。

「レクリエーションについてまじめに語れる場が最近無かった」との参加者の声に代表されるように、このような機会はとても貴重なものでした。

「福祉レクリエーションはなにか」とは不変のテーマ。

レクリエーションとは何かをもう一度問い直そう。

あなたは実践者？研究者？(会場内の参加者は圧倒的に実践者)。

レクリエーションとは何？

パネリスト:「人と人との関わり」「人間教育」「人間形成」と言う実践者に対して
研究者からは「遊びそれ自体」と言う話しもあった。

「レクリエーション」に限らず、その言葉が広まるか、
広めるかというのは、広めようという人の戦略次第ではないか。

フロア:レクリエーションは見向きもしてもらえない。

レクリエーションという言葉を使わない方が現場ではやりやすく、
楽しんでいただいた後で、『実はこれがレクリエーションですよ』と
言うと納得してもらえる。(多くの方がうなづく。)

パネリスト:レクリエーションがどのような効果を生むかを、

伝える側が理解していないと弱い。

「アクティビティ・サービス」には明らかにレクリエーション批判が
あるが、他のレクリエーションと隣接した新しい言葉はどうかとい
うと、それがわからないからよくわからない。

相互発信、情報交換をしてこそ、レクリエーションの意義を大切に
感じている私たちの声が大きくなる。

運動体として都道府県協会に関わっているか？

都道府県協会につながっていない方が、参加者の半数近く。有
レクリエーション協会はなくても困らないと言う声もあり。

フロアからの声、フロアとのやりとり

パネリストの平易な言葉使いが「わかりやすかった」という声が多数聞かれたが、『私が
変える』というタイトルでありながら具体性に欠け、よくわからなかった」

レクリエーションという言葉が社会的にうまく受け入れられていない。
(参加者の半分以上)

その評価を上げるのは誰？

自身の努力でその評価を翻していかないといけない。

レクリエーションがなぜ広がらないか？

レクリエーションを短い言葉で分かりやすく説明できていない。

レクリエーションの資格を持っているのに仕事につながらない。

(有資格者がいきいきと活動している様子をもっとアピールできないか？
ネットホームページなどで・・・)

パネリストからのまとめ

- ・レクリエーションは個人的なものであるがゆえに多様である。
- ・人との係わりの技術が大事。援助者はそれをわすれてはいけない。
- ・ひとりひとりの喜びを確認しながら援助していくことで、
レクリエーションの価値が認められる。

参加者からの感想 など

- ・「レクリエーションは遊びである。」を実感した。
- ・レクリエーションの基本について、先生の話は参考になった。
- ・人間作りを積み上げること。話し合いを愉しむことを意識していきたい。
- ・「あなたが変わる」どのように変えたらよいか分からずつまらない話。(愛知)
- ・言葉をどう伝えていくか難しい問題でありあまり考えていなかった。
このミーティングで考えさせられた(愛知)。
- ・「変える」何を。福祉レクのどこが悪いのか？(埼玉)
- ・途中参加したが、レクリエーションという言葉を考えさせられた良い機会でした。
- ・皆さんの話が分かりやすく納得のいく話しでした。
- ・レクの意味を説明するのに苦労していることが理解できた。
- ・とても有意義。福祉に携わっていないけれども、自分の参考になった。
- ・初めて出会ったパネリストに共感できた。ゆっくり語り合える機会を作りたい。
- ・介護職。フォーラムに参加し、レクが無くなることは無いと思いました。
業務に追われ時間は無いが、少しでも個別に取組みたい。
- ・施設におけるレクの大切さが確立されていない中で、考えが再確認できた。
- ・レクリエーションのアクティビティは加算が無い。看護師のアクティビティは
機能訓練で加算がとれる。

パート2(滋賀) 2011年9月

パネリスト マーレー寛子氏(むべの里施設長)
荒深裕規氏(日本福祉大学特任准教授)
清水津利江氏(福祉レクリエーションネットワーク京都代表)
コーディネーター 佐藤喜也(全国福祉レクリエーション・ネットワーク 代表)

レクリエーションって一言で何？

マーレー氏

レクリエーションとは、心の在り方。
面白いという活動・時間がたくさんあっても、
心の在り方がそうでなければ楽しくない。これからのレクリエーションはここ。

荒深氏

レクリエーションとは、一人ひとりの生活を楽しく豊かにするもの。
レクリエーションにプロは必要？(フロアの反応は半々)
プロとは、理由をきちんと説明できることではないか
アルツハイマー・認知症どんなレクがいいですか？と聞かれるが、
病気ではなく人を見て、選択の幅を広げることではないか。
一人ひとりにアプローチするために。

清水氏

レクリエーションとは、一つのイベントとしてとらえられる部分がまだまだ多い。
楽しませるところから始まったが、生活の中でいかに楽しめるかということが
レクリエーションではないか。
機能のすべてがいずれ落ちていく、その落ちる坂をいかに緩やかにしていくか
そこにレクリエーションの意味がある。

一人ひとりが楽しむというところにちゃんとアプローチをしてきたか。

6グループに別れ、グループごとに話し合い。

レクリエーションの活動がなかなか広がらない。
それは何故？ 誰が、何をこれからしていかなければならないのか。

各グループからの発表

- ・レクリエーションを大事にしたい。またそれ以外にも生活全般を大事にしたい。
- ・レクリエーション財をもっともっと勉強したい。
- ・被災者の方に対してどんなことができるのかこれから考えたい。
- ・プロだからこそ、一人ひとりの表情から状況を見抜くことができるように。
- ・経営者スタッフの熱意・レベルによる。
- ・「楽しいこと」が提供者側も楽しいか、「やってあげる」になってないか？
- ・それぞれが楽しんでいただけるようなことが必要。
一つ一つの素材の完成型を目指さなくてもいいのでは

- ・健康を考えたい。理論も大事。身体を動かし、心と体をワクワク。
- ・グループ活動から一人一人を大事にする。
- ・これから益々必要となっているのになぜ会員は減るのか？
現状で福祉では食べていけないから。
- ・活動を維持していくためのプロフェッショナルが必要。
- ・レクリエーション資格を福祉の世界で活かす制度の整備が必要。
- ・介護福祉士カリキュラムにレクリエーションが位置づいていたことが追い風になっていたことは事実。いつの間に無くなったのか。現場では相変わらず大切。

マーレー氏

現場ではもっともっとレクリエーションは必要とされている。
 訓練された学生が出て来ないから、プロはもっと必要とされている。
 「生活を楽しくする」事は本当に必要。
 生活の快が当たり前になってきている。これはレクリエーション関係者のおかげ。
 今は次の段階に入っている。余暇生活をどう充実させていくかが重要。
 具体的な支援の仕方とか、プログラムやアプローチの方法が重要。
 福祉レク・ワーカーの資格は経営者が取るべき資格だと思っている。
 レクリエーション援助は利用者の満足度を上げていく要素だと思っている。

日レク職員より 福祉レク・ワーカー受講者は右肩下がりの現状ではある。
 一方、福祉分野から研修会の依頼が増えていることも事実。

生活の快の次の段階で何をやるか。

荒深氏

レクリエーションは確かに以前と比べ生活の中に溶け込んでいる。
 次に何をやるかを決断する時期。定義付けをしないと現場は決断できない。
 何でもレクだと思っているが、「『介護予防』だけで行こう。」と言うように、
 「これだけは」というものを出していく時期。あいまいだと説明できない。

清水氏

続けていくことが、本人に変化をもたらす。
 単なる遊びだけではない。トレーニングの要素を入れて行う。
 「今」やらないと、もっともつとできなくなる。
 レクリエーションとしての「学習」。自由時間の質が変わっていく。

マーレー氏

結果もプロセスもレクリエーションである。
 自由と感じる時間・内容・心の在り方。自己決定。
 最終的に自分で選んだ活動は楽しい。楽しみはどんな人でも感じるができる。
 選べない人が、選べるようになるために何が必要かが支援。
 選択肢が多ければよいわけではなく、時にそれはストレスにもなる。
 楽しむことができるようになる段階で、何をどう援助するか。

フロアへの質問

様々な活動がレクリエーションとして存在して良い？ <フロア>良い！！

新しい定義付けが必要なのでは？ <フロア>半々

生活の快は今は当然。次の段階に行くべきなのは？ <フロア>半々

フロアからの意見・質問

介護福祉のカリキュラムからレクリエーションが外れた。必要だったら残せばよい。癒し・楽しみ・歓びの原点がレクリエーションだと思っている。これをつぶしてはいけない。

介護予防は国民の健康を支える。レクリエーション援助法がなくなった結果としてどうなっているか、調査が必要なのでは。

福祉レクリエーションが制度としてないと、お金にならない。ぜひ制度をキチンとして、福祉レク・ワーカーの仕事がお金になるようにしてほしい。

マーレー氏

機能訓練加算でも、OT・PTがいないと取れない。

運動としてのアピールが必要。先に結果を出して、儲けは後から付いてくる。

清水氏

ますます頑張らねばと思う。

荒深氏

ネットワークを強化していくこと、プロを育てていくことを協会にお願いしたい。

マーレー氏

自分たちが活動しやすいフィールドを作ることが実は大事。その環境ができると、職員も生き生きするし、離職率も下がる。

パート2の今回、福祉レクリエーションの制度の確立という課題が大きくクローズアップされた。パート3はその「制度化」という課題を話し合ってみたいと思います。

パート3(福井) 2012年9月

パネリスト 藤岡多智子氏(かがわ健康福祉機構研修部部長)
小池和幸氏(仙台大学教授)
二宮莖子氏(宮崎県レクリエーション協会事務局長)
コーディネーター 佐藤喜也

レクリエーションとは何か? 遊びでよいのか?

人と人とのつながりを大切に、心のあり方を大切にさまざまな活動がある中で、
楽しいを感じるために 何をどのように支援すればよいのか?
自己決定、選択肢の提供、生活の快とは、次の段階に来ている。
福祉レクリエーションの領域でご飯が食べられるかということも課題。

小池氏

平成6年から開始された福祉レク・ワーカーを準備した経験がある。
専門職として生かす方向性とセラビューティックレクの視点。
楽しい遊びをした後で話し合うことが大切。誰がその役割を担うのか。

二宮氏

県レク協会の立場で県内のレク事業、日レクとの事業調整をしている。
福祉領域からのレクに対する要請は高い。
福祉レクを変えようとする意欲は素晴らしい。現場の生の声が聞けて良い。
レク素材の提供だけではままならないところに来ている。
県レクの考えているところは、課程認定校の大学と連携している。

藤岡氏

福祉の専門の課題別研修を設定している。
研修の内容が現場のニーズに合っており、
職員に必要な仕事わかっている講師がよい。
言葉づかい、態度など
一人一人のプライドを傷つけないような最低限のアプローチができ、
気配りをしているがそれを相手に感じさせない配慮ができる方がよい。

コーディネーター

福祉レクリエーションのニーズは高いということはわかったが、
なかなか広がらない問題がある。
では誰が、何をすればよいのか。
制度の問題 自分自身の取り組みを考えどんな制度があればよいのか
グループでディスカッション。

グループディスカッション

- 一人一人の考え方が違う。
- 福祉レクの情報が少ない。
- 行政とのコーディネート役がない。
- どうして広がらないのか → レクの時間を作るのが難しい。
 - どれもがレクという考え方もある。
 - 行政の理解不足もある。レクは単に遊びではない。
- 福祉レクは社会に貢献できるか。
- 人材、コーディネートの内容が不足。レク・ワーカーの専門分野とは何か？
- 福祉レクの歴史と今日までの動きを確認。
- レクの専門性が理解されていない。福祉レクリエーションという言葉が一人歩き
- ダイバーショナルセラピー (オーストラリア) 人生楽しくないと損。
- 個別に対応していくようなレクの理念が正しく伝わっていない。
- レクの専門性は何かを突き詰めることがこれから重要。
- 外に出て、社会福祉やレクに対するニーズを知り、それに対して対策を立てる。
- メニューをそろえることも必要。

藤岡氏

全国に展開したいなら自分がすることである。
どこかの誰かにぶら下がって、いずれお金につながるなんて考えは、甘いと思う。
レクをしている人の技術だけでなく、考え方、人格が関わってくる。
レク支援する人によって、実施する内容がかわって、評価が難しい。
レクの専門性とは何か。
現場のニーズはすごくある。

スポーツ基本法が制定された。
65歳以上の人口は3000万人を超え、日本人の4分の1が高齢者になった。
時代は変わっている。これからますます高齢者向けのニーズは広まっていく。
レク財の開発の仕方を考えることも大切。心がどうやったら動くのか。

二宮氏

レクの専門性とは? 資格を生かし、後進を育てる。
人生の奥深いものを伝えていくことが専門性。
人と人とのコミュニケーションが大切。

小池氏

レクが理解されていない中で、レク支援者が肩身の狭い思いをしている。
自信を持ってほしい。

フロアーから

レクに大切なものとは、一人一人をよく見て大切にすること。

個人個人のチェックリストを作っている。福岡大会でこのチェックリストを作ろう。高齢者、障がい者に関し、もっと科学的な話がしたい。

レク財だけでなく、+アルファの科学的な目を持ち、財の開発とは話を分けてもらいたい。福祉レクネットワークとしてのアピールは何をどのようにアピールするか

二宮氏

レクをしている人は元気。

レクをやろうと言っても「うーん」という人に対し、
「私を見て」ということも一つのセールスポイント。

藤岡氏

行政への売りどころ。楽しいというところ、喜び楽しみ。

みんな知らん顔。平気を装っている。

高齢者や障がい者に対して幸せなレクの専門性を届けてもらいたい。

他に無いものとして、人とのつながり、一緒に楽しめるところ。

これが、孤独からの解放につながるレクの醍醐味である。

小池氏

レクを売って行こう。福祉レクワーカーの養成。

レクが発展するために4つのキラー

①教育 ②運動 ③政治力 ④福祉レクワーカーの育成
教育の制度は三位一体「職場」「研究」「教育」この3つの連携が大切。

これらと共に実践報告すること。エビデンスを出す。

新たなスタートラインに立つこと。

マーケットとターゲットを明確にする

集団でなく個人への支援になるのに、グループを支援している。

レクそのものも国民の個人の幸せを願うもの。

グループを幸せにするものでない。個人に焦点をあてていく。

グループレクのネタほしさ。グループで使うネタを求めることに、

反省すべきところもある。

一人一人がよくなることを狙いとする。

レクの専門性。素敵な効果を説明するにしても、何のエビデンスも持っていない。

この分野の研究は出来ていない。

コーディネーターから

楽しいということの根拠は必要なのか。自分で拓げていくこと。

他の職種とコラボしていくことが必用。

たくさんの人に幸せ感を伝えたい。福岡大会に向け、意見を集約する。

感想でなく福祉レクの提言。

3つの制度の確立

- 1 人を育てる制度
- 2 有資格者が稼げる制度 (エビデンスが欠かせない)
- 3 行政を動かす制度 (文科省、厚労省)
大きなレクリエーションとして福祉の提言をしよう。

以上のとおり、福祉レクリエーション・ネットワークは、今後の福祉レクリエーション運動を活性化するための多くの意見を頂き、それらを、常任委員会、福祉レクリエーションフォーラム等でまとめて参りました。

その内容を、次のとおり提言します。

4 福祉レクリエーションの制度化へ向けての提言

その1 福祉レクリエーション・ワーカーをはじめとする レクリエーション有資格者の拡大を図るために

- (1)レクリエーション指導者養成大綱および養成規定を改定すること。
 - ① レクリエーション有資格者の底辺の拡大を図るため、導入となるステップを新設すること。
 - ② インストラクター養成課程に、専門資格への橋渡しができる内容を導入し、福祉レクリエーション・ワーカーや、レクリエーション・コーディネーター資格を再構築すること。
 - ③ 人材養成に関して、有資格者を入れた専門委員会を再構築し、活性化を図ること。

- (2)レクリエーション活動によってもたらされる様々な恵み(効果)を使い、福祉関係機関・団体との連携を深めること。
 - ① 文部科学省との連携に加え、厚生労働省との連携を具体的に進めること。
 - ② 福祉レクリエーションに関係する機関・団体と、具体的な動きを始めるための連絡会議を設置すること。

その2 社会福祉の現場等で、福祉レクリエーション・ワーカーを はじめとするレクリエーション有資格者が、 高い認知を獲得するために

- (1)資格名称等の再検討を含め、より社会的認知を受けやすい資格に再構築すること。

- (2)介護福祉士養成課程や介護員等の研修課程に、コミュニケーション・ワークを中心としたレクリエーション・ワークを位置づけるため、関係省庁への働きかけを継続・強化すること。

- (3)医療・福祉の領域で点数化される活動支援者に、専門職としてのレクリエーション有資格者を加えるよう、関係省庁に対して新しい働きかけを開始すること。

- (4) 医療・福祉の専門職と対等に渡り合える、より専門的で高度な専門資格の新設を検討すること。
- (5) 新設を検討する専門資格および現状の福祉レクリエーション・ワーカーの専門組織を全国福祉レクリエーション・ネットワーク内に位置づけ、福祉レクリエーション運動の一本化を図ること。
- (6) これらを実行するための、有資格者も含めた福祉レクリエーションに関する専門委員会組織を(公財)日本レクリエーション協会の中に設置すること。

5 福祉レクリエーションの制度化に向けた我々の責務

(公財)日本レクリエーション協会への提言をするにあたり、全国福祉レクリエーション・ネットワークに関わる者として、また福祉レクリエーション・ワーカーとして、あるいは一人のレクリエーション有資格者として、私たち自身も変わらなければなりません。

福井におけるキックオフミーティングを通して、私たち一人ひとりの努力や研鑽は十分だったのか？ 私たち自身が、レクリエーション活動に自信と誇りを持って関わってきたのか？ 私たちは、それぞれ身近なフィールドでレクリエーションの魅力を十分に伝えきってきたのか？など、反省すべき点も多く上げられました。

今後は、私たち自身も次のことを自らの責務としてとらえ、努力と研鑽を続けて参ります。

- (1) レクリエーション有資格者の専門性について検討を深めるとともに、一人ひとりが専門性を高めるため、不断の努力を惜しまないこと。
- (2) レクリエーションに関する実践研究の総数を増やし、その質を高めること。

6 まとめとして

私たちは、(公財)日本レクリエーション協会から公認を受けた有資格者を名乗っています。

(公財)日本レクリエーション協会から公認を受けた有資格者として、自信と誇りを持って仕事をしたいと願っています。

スポーツ基本法をはじめとするレクリエーションに関連する最近の状況は、(公財)日本レクリエーション協会が、レクリエーション運動における我が国のナショナルセンターとして、信頼に足る組織であることを明確に物語っているものであると感じています。

私たちは、(公財)日本レクリエーション協会と歩みをともにしながら、福祉レクリエーションの制度化に取り組むとともに、レクリエーション有資格者の専門性の向上に今後も取り組んで参ります。

(公財)日本レクリエーション協会におかれましては、私たちのこの小さな提言を是非お聞き届けいただき、より大きな運動展開にご尽力くださるようお願い申し上げます。

平成 25 年 10 月 26 日